

令和2年7月号（特別編）

一宮町の歴史特集 特別編
戦後75年 一宮町と太平洋戦争（上）

令和2年（2020）はまだ半年しか経っていませんが、この年は歴史上名を残す年となるでしょう。新型コロナウイルスのパンデミック、それに伴う東京オリンピックの延期。どれも未曾有の出来事であり、いまだ終息の見通しもたつていません。これからのどのくらいかかるかわかりませんが、私はこの脅威を克服していかなくてはなりません。

さて、今年は昭和20年（1945）の終戦から75年目の年です。戦争を経験された方が少なくなり、この歴史を風化させずに、後世にしっかりと伝えていかなくはなりません。今回から2回にわたり、一宮町と太平洋戦争について綴っていきます。



▲ 風船爆弾打ち上げ基地跡（一宮 6-35 付近）

風船爆弾

一宮町と戦争の歴史を語るうえでまず思い浮かぶのが風船爆弾でしょう。風船爆弾は日本陸軍の秘密兵器で直径約10mの気球に爆弾を吊り下げ、アメリカ本土を攻撃する兵器でした。昭和19年（1944）11月から翌年3月にかけて、一宮と勿来（福島県いわき市）、大津（茨城県北茨城市）の3か所の基地から打ち上げられました。合計で約9000個が打ち上げられ、約3000個がアメリカ本土にたどり着いたといわれており、オレゴン州では民間人6名が犠牲になりました。

一宮海岸に築かれた基地は円形のコンクリート台が数基築かれ、その一部には風よけのために高さ約20mの暴風壁が造られたといえます。その基地にむかつて、物資の運搬用に上総一ノ宮駅から引き込み線（線路）がひかれました。この線路の建設には地元住民の方も「勤労奉仕」として従事したといえます。戦後、打ち上げ基地の土台部分のコンクリートは破壊され、地元の人々が持つて帰りました。そのうち

の一つが、現在町教育委員会で保管されています。

昭和51年（1976）、時の向井十郎一宮町長はオレゴン州知事に宛てて、犠牲者への哀悼の文書を送りました。その後同州のストラウヴ知事から感謝の返信があり、現在その資料も教育委員会で保管されています。



▶ オレゴン州知事からの返書

本土決戦への準備

戦局が悪化する中、一宮を含めた九十九里沿岸でも本土決戦にむけた準備が進められました。昭和19年7月には「本土沿岸築城実施要綱」が定められ、九十九里浜や鹿島、八戸等に陣地の構築が命じられました。

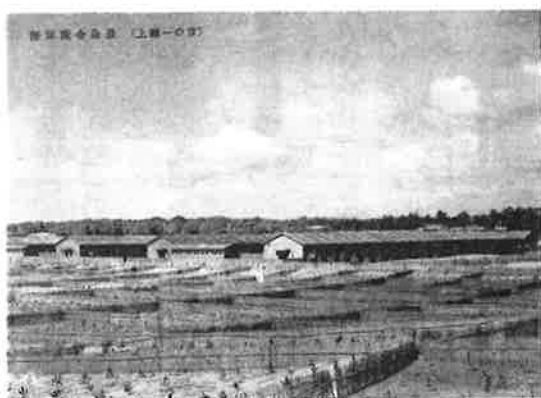
昭和20年2月には本土決戦のために編成された陸軍第147師団歩兵第426連隊が一宮に配属され、洞庭湖周辺に指揮所壕や砲台が築かれました（※現在は私有地のためこれらの戦跡は見学できません）。防空壕掘りや砲

台の基礎作りには、風船爆弾への引き込み線作り同様、地元住民の方が「勤労奉仕」として従事しました。

一宮海岸の陸軍廠舎

開戦以前から、一宮海岸北側には陸軍の演習場である廠舎がありました。実弾演習のほか、太平洋に面していたため、遊泳演習もあつたそうです。この廠舎は戦後まもなく火災にあい、焼失したといえます。

ちなみにこの廠舎は左の写真のように、絵葉書として発行されていました。廠舎の内部の写真の他洗面所までもが絵葉書になっています。



▲ 海岸にあった陸軍廠舎

（次号へつづく）

【問合せ】教育課 江澤一樹
（教育委員会）
☎(42)1416

一宮町の歴史特集 特別編 戦後75年 一宮町と太平洋戦争（下）

町民の戦争の記憶

平成20年、21年と町では聞き取り調査を実施、その調査結果は『町民が語る昭和の一宮』『同2』として刊行されています。そして現在でも年に数件聞き取り調査を実施しています。

先月のコラムでも書きました、風船爆弾や勤労奉仕の話も多く聞きます。そのうちいくつかを紹介します。

まず、シンガポール陥落時の話です。昭和16年（1941）12月の日英米開戦、つまり海軍の真珠湾攻撃と同時に進められたのが陸軍によるマレー作戦です。イギリス領マレー半島に上陸した陸軍は、難攻不落とされたイギリス軍のシンガポール要塞を昭和17年2月に攻略しました。

陥落のニュースが届くと、2月18日には先の真珠湾攻撃などの成功を祝う戦勝記念式典が東京で行われ、日本各地も活気に沸きました。一宮では国道で街頭行進が行われ、大勢の人が見守ったといわれています。

続いて、機銃掃射の話です。茂原には日立の工場があり、空襲を受けていたことは知られていますが、一宮では空襲を受けたという話はあまり聞きま

せん。しかしながら太平洋のアメリカ軍空母から飛び立ち、茂原や東京へ爆撃に向かう艦載機の航路上にあることから、機銃掃射を受けたという町民の方の話もあります。また、海上の軍艦からの艦砲射撃をみた（狙われたのは白子方面の模様）という話、空襲警報と防空壕の話、昭和20年1月に現在の下村地域に墜落した日本軍機の話など、ここでは書ききれないほどの貴重な「証言」があります。

玉前神社境内には戦争の招魂殿と石碑が建てられています。東浪見駐在所横にも忠魂碑が建立されており、それぞれ戦没者名が記されています。町自体に大規模な被害が確認されていないとはいえ、町民の方々は否応なく、戦争に巻き込まれていたのです。



▲ 玉前神社境内の招魂殿と石碑



▲ 東浪見の忠魂碑（東浪見1639-2付近）

一宮町事件

最後に取りあげるのが、一宮町事件（ホックレー事件）です。

昭和20年8月15日午前10時頃、長生郡西村（現長南町）の上空で、イギリス軍空母の艦載機が日本軍の戦闘機によって撃墜され、搭乗員だったフレッド・ホックレー少尉は東村（現長南町）にパラシュート降下し、警防団員らに捕獲されました。第147師団歩兵第426連隊に引き渡され、午後には土睦村（現睦沢町）妙勝寺に駐屯する連隊本部に移送、将校の宿舎として使われていた隣家の庭の木に縛られたといわれています。午後5時頃に同隊の中隊本部が置かれた一宮の個人宅の屋敷に連行されました。

玉音放送後で日英の戦闘状態が終わっていました。ホックレー少尉は洞庭湖付近の山中に連行され、その場で銃殺されてしまいます。処刑後遺体は

山中に埋葬されましたが、その後掘り起こされ火葬、一宮の実本寺に一時安置されました。

戦後、この事件に関与した将校3名は香港で行われたBC級戦犯裁判にかけられ、2名は絞首刑（昭和21年9月に執行）、1名は禁固15年の判決をうけました。

玉音放送後の事件であり、なぜホックレー少尉は殺されなければならなかったのかなど戦後75年が経った今でも多くの謎が残されています。

2回にわたり、一宮と戦争についてその一部を紹介しました。まだまだ書き足りないことも多くあります。

戦後75年。昨年は風船爆弾打ち上げ75年と題して講演会を開催しました。これからも町民のみなさんとともにこの歴史を調べ、後世に「記憶」を「記録」として、残していきたいと思えます。

（終）

〈主な参考文献〉

- ・『幻の本土決戦 房総半島の防衛』第5巻（千葉日报社、1991年）
- ・『町民が語る昭和の一宮』（町教委、2008年）
- ・『町民が語る昭和の一宮2』（町教委、2012年）
- ・その他風船爆弾関係書籍

（教育委員会 江澤一樹）

【問合せ】教育課 ☎1416